

公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き（抜粋）  
～ 再編（統合）に関する課題等 ～

①【学級数が少ないことによる学校運営上の課題等】

（デメリット）

- 児童生徒数や教職員数が少なくなることによる影響も含め、下記のような学校運営上の課題が生じる可能性があります。
  - (1)クラス替えが全部又は一部の学年でできない
  - (2)クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない
  - (3)加配なしには、習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい
  - (4)クラブ活動や部活動の種類が限定される
  - (5)運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育効果が下がる
  - (6)男女比の偏りが生じやすい
  - (7)上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる、学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなる
  - (8)体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる
  - (9)班活動やグループ分けに制約が生じる
  - (10)協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる
  - (11)教科等が得意な子供の考えにクラス全体が引っ張られがちとなる
  - (12)生徒指導上課題がある子供の問題行動にクラス全体が大きく影響を受ける
  - (13)児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる
  - (14)教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎる

以上の課題は、学級数や学級当たりの児童生徒数の減少に応じて一層顕在化することが懸念されます。また、特に複式学級となる場合には直接指導と間接指導を組み合わせ、複数学年を教員が行き来しながら指導する必要がある場合が多いことから、以下のような課題も生じ得ることが指摘されています。

- (1)教員に特別な指導技術が求められる
- (2)複数学年分や複数教科分の教材研究・指導準備を行うこととなるため、教員の負担が大きい
- (3)単式学級の場合と異なる指導順となる場合、単式学級の学校への転出時等に未習事項が生じるおそれがある
- (4)実験・観察など長時間の直接指導が必要となる活動に制約が生じる
- (5)兄弟姉妹が同じ学級になり、指導上の制約を生ずる可能性がある

（メリット）

- 一般に各学年で複数の学級を編制できる場合は、クラス替えが可能になることの影響も含め、

- (1)児童生徒同士の間関係や児童生徒と教員との人間関係に配慮した学級編制ができる
- (2)児童生徒を多様な意見に触れさせることができる
- (3)新たな人間関係を構築する力を身に付けさせることができる
- (4)クラス替えを契機として児童生徒が意欲を新たにすることができる
- (5)学級同士が切磋琢磨する環境を作ることができる
- (6)学級の枠を超えた習熟度別指導や学年内での教員の役割分担による専科指導等の多様な指導形態をとることができる
- (7)指導上課題のある児童生徒を各学級に分けることにより、きめ細かな指導が可能となるといった利点があります。

## ②【教職員数が少なくなることによる学校運営上の課題等】

(デメリット)

- 小・中学校共通して、学級数が少なくなるに従い、配置される教職員数が少なくなるため、下記のような問題が顕在化し、結果として教育活動に大きな制約が生じる恐れがあることに留意が必要です。
  - (1)経験年数、専門性、男女比等バランスのとれた教職員配置やそれらを生かした指導の充実が困難となる
  - (2)教員個人の力量への依存度が高まり、教育活動が人事異動に過度に左右されたり、教員数が毎年変動することにより、学校経営が不安定になったりする可能性がある
  - (3)児童生徒の良さが多面的に評価されにくくなる可能性がある、多様な価値観に触れさせることが困難となる
  - (4)ティーム・ティーチング、グループ別指導、習熟度別指導、専科指導等の多様な指導方法をとることが困難となる
  - (5)教職員一人当たりの校務負担や行事に関わる負担が重く、校内研修の時間が十分確保できない
  - (6)学年によって学級数や学級当たりの人数が大きく異なる場合、教員間に負担の大きな不均衡が生ずる
  - (7)平日の校外研修や他校で行われる研究協議会等に参加することが困難となる
  - (8)教員同士が切磋琢磨する環境を作りやすく、指導技術の相互伝達がなされにくい  
(学年会や教科会等が成立しない)
  - (9)学校が直面する様々な課題に組織的に対応することが困難な場合がある
  - (10)免許外指導の教科が生まれる可能性がある
  - (11)クラブ活動や部活動の指導者確保が困難となる
- 上記で述べたような学級数が少ないことによる学校運営上の課題は、いずれも一般的に想定されるものであり、実際に個別の課題が生じるかどうかは、地域や児童生徒の実態、教育課程や指導方法の工夫の状況、教育委員会や地域・保護者からの支援体制など、学校が置かれた諸条件により大きく異なりますが、仮に上記のよう

な課題が生じた場合、児童生徒には以下のような影響を与える可能性があります。

- (1) 集団の中で自己主張をしたり、他者を尊重する経験を積みにくく、社会性やコミュニケーション能力が身につけにくい
- (2) 児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい
- (3) 協働的な学びの実現が困難となる
- (4) 教員それぞれの専門性を生かした教育を受けられない可能性がある
- (5) 切磋琢磨する環境の中で意欲や成長が引き出されにくい
- (6) 教員への依存心が強まる可能性がある
- (7) 進学等の際に大きな集団への適応に困難を来す可能性がある
- (8) 多様な物の見方や考え方、表現の仕方に触れることが難しい
- (9) 多様な活躍の機会がなく、多面的な評価の中で個性を伸ばすことが難しい

### ③【学級の児童生徒数及び学校全体の児童生徒数の課題等】

(デメリット)

- 以上で学級数が少ないことの課題について述べてきましたが、学級数は同じであっても、各学級の児童生徒数や学校全体の児童生徒数には大きな幅があり、児童生徒数が少ない場合には、一定の学級数があっても、教育活動の質の維持が困難となる場合もあります。このため、学校規模の適正化の検討に当たっては、学級数と併せて学級における児童生徒数や学校全体の児童生徒数も考慮する必要があります。

#### (1) (学級における児童生徒数 (学年単学級の場合) )での課題等)

(デメリット)

- 学級は、児童生徒が学校生活の大部分を過ごす基本単位であり、特に単学級の学年が生じているような場合については、学級規模（1学級の児童生徒数）を考慮することが極めて重要になってきます。一口に単学級といっても、学級の児童生徒数が10人にも満たない場合から40人の場合まで様々です。一般に、学級規模が小さいと、きめ細かな指導がしやすくなる、様々な活動のリーダーを務める機会が増える、発言の機会を多く確保できるようになるといったメリットがありますがその一方で、学級における児童生徒数が極端に少なくなった場合、①【学級数が少ないことによる学校運営上の課題等】で述べた学級数が少ないことにより生じる様々な課題のうち、以下の点が特に顕著な課題として現れてきます。

- ① 運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育効果が下がる
- ② クラス内で男女比の偏りが生じやすい
- ③ 体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる
- ④ 班活動やグループ分けに制約が生じる
- ⑤ 協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる
- ⑥ 教科等が得意な子供の考えにクラス全体が引っ張られがちとなる
- ⑦ 児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる

⑧教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎる

## (2) (学校全体の児童生徒数での課題等)

(デメリット)

- 次に、学校全体の児童生徒数の観点で見ると、各学年単学級の小学校の場合、児童数は40人程度から235人程度まで、各学年単学級の中学校の場合、生徒数は、15人程度から120人程度まで幅広いケースがありうるところです。
- 教職員の加配等により学校全体の学級数を一定程度確保している場合でも、学校全体の児童生徒数が極端に少なくなった場合、①【学級数が少ないことによる学校運営上の課題等】で述べた学級数が少ないことにより生じる課題のうち、以下の点については特に顕著な課題として残る可能性があります。
  - ①クラブ活動や部活動の種類が限定される
  - ②運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育効果が下がる
  - ③学校全体として男女比の偏りが生じやすい
  - ④上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる、学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなる

## ④【児童生徒への効果（統合事例から）】

(メリット)

- 過去の統合事例からは、児童生徒への直接的な効果として、おおむね下記のようなものが報告されています。
  - (1)良い意味での競い合いが生まれた、向上心が高まった
  - (2)以前よりもたくましくなった、教師に対する依存心が減った
  - (3)社会性やコミュニケーション能力が高まった
  - (4)切磋琢磨する環境の中で学力や学習意欲が向上した
  - (5)友人が増えた、男女比の偏りが少なくなった
  - (6)多様な意見に触れる機会が増えた
  - (7)異年齢交流が増えた、集団遊びが成立するようになった、休憩時間や放課後での外遊びが増えた
  - (8)学校が楽しいと答える子供が増えた
  - (9)進学に伴うギャップが緩和された
  - (10)多様な進路が意識されるようになった

## ⑤【指導体制や指導方法、環境整備等への効果（統合事例から）】

(メリット)

- また、指導体制や指導方法、環境整備等に与えた効果としては、おおむね下記のようなものが報告されています。
  - (1)複式学級が解消された
  - (2)クラス替えが可能になった

- (3)より多くの教職員が多面的な観点で指導できるようになった
- (4)校内研修が活性化した、教職員間で協力して指導にあたる意識や互いの良さを取り入れる意識が高まった
- (5)グループ学習や班活動が活性化した、授業で多様な意見を引き出せるようになった
- (6)音楽、体育等における集団で行う教育活動、運動会や学芸会、クラブ活動、部活動などが充実した
- (7)少人数指導や習熟度別指導などの多様な指導形態が可能になった
- (8)一定の児童生徒数の確保により、特別支援学級が開設できた、特別支援教育の活動が充実した
- (9)バランスの取れた教員配置が可能となった、免許外指導が解消又は減少した
- (10)施設設備が改善され教育活動が展開しやすくなった、教材教具が量的に充実した
- (11)校務の効率化が進んだ、教育予算の効果的活用が進んだ
- (12)保護者同士の交流関係が広がった、P T A活動が活性化した、学校と地域との連携協働関係が強化された